戦前のイモ類は多彩な名称を数多く持っていた

ー「聞き書・日本の食生活全集」の記述よりー

本間伸夫　立山千草

聞き書・日本の食生活全集[1]（以下、聞き書と略記）の記述の数量化の試みを生鮮肉類に適用した結果[2]を承けてイモ類への適用を企画した。

しかし、イモ類にはかなりの別名（地方名）の存在が予想されることから、この別名を確認することなしでは目的とするイモ類を正しく検出できない、という問題に直面した。その解決のため、イモ類についての数量化の試み[3]に先立ち、聞き書の記述を対象にして別名を検出し整理した。

その結果、予想以上に多数の別名の存在を認めたので報告する。

方　法

1．分析資料

聞き書・日本の食生活全集の都道府県版47巻、索引版２巻、そのCD版。

2．対象とするイモ類

馬鈴薯、甘藷、里芋類、長芋類、菊芋の５種。

3．イモ類の名称の検索と数値化

主にCD版により検出された名称について、本文上での記述で検討し、目的とするイモの名称であることを確認した。数値化は、前報[2]に準じて行った。

検出地点数：イモの名称を検出した調査地点の数。

検出地点比＝検出地点数／都道府県に割り当てられている調査地点数。統計分析に使用した。

検出頻度＝検出地点数／296。1調査地点当たりの検出地点数の全国値。296は調査地点の全国総数。

4．東西地域性

前報に準じて、中部地方以東を東日本、近畿地方以西を西日本とし、検出の多い名称についてのみ分析した。

ほんま　のぶお
〒950-0813 新潟市東区大形本町２-３-28（自宅）
たてやま　ちぐさ
〒950-0813 新潟市東区海老ケ瀬471　新潟県立大学

結果および考察

1．検出されたイモ類の名称と検出地点

検出された名称は、イモの種類ごとの通し番号、名称、地域名、注記の順に記載されている。名称は聞き書での記述のままとし、同一ないしは類縁と思われるもの、音感が酷似しているものはグループとしてまとめてある。グループ内で検出数が最多のものを代表とし、それを五十音順に列記した。地域名は検出地点の所在地であって、原則として都道府県単位で示してある。

検出地点の分布に特徴あるケース５例を図示した。

下記に記載した名称数を集計すると、馬鈴薯37、甘藷29、里芋50、長芋26（珠芽を除く）、菊芋４、合計146となる。

1-1馬鈴薯

1）あかいも：福島。
2）あんぶら：秋田。
3）からいも：宮城。甘藷に多い名称であるが。
4）かんぷら、かんぷらいも：秋田・福島・茨城。
5）きんかいも、きんかんいも：主に中国地方。
6）こうぼういも、こうぼいも、こぼいも：三重・鳥取・島根・岡山。
7）五月いも：福井。他の月名のものは不検出。
8）ごしょいも、ごうしいも、こうしいも、こしも：北海道・秋田・長野。
9）ごといも：秋田・徳島。
10）三度いも：群馬・兵庫。
11）じゃがいも、じゃがたら、じゃがたらいも、じゃんがら、じゃんがらいも、じゃが：広範囲であるが東日本に偏在。「じゃがいも」が圧倒的に多く検出され、馬鈴薯を代表する名称。（表参照）
12）しんしいも：埼玉。
13）せいだ、せいだいも、せんだいも：神奈川・山梨・岐阜。
14）だごいも：富山。
15）つるいも：東京（奥多摩）。
16）なついも、夏いも：宮城・山形・長野・石川。他の季節のものは不検出。
17）にどいも、二度いも：東北と新潟、近畿と四国の２

地方にまとまって分布。「じゃがいも」に次いで多い。（図、表参照）

18）はっしょいも：兵庫。

19）馬鈴薯：主に、聞き書本文中に引用や紹介の文書中にあるもので、日常語としての使用は希。

20）ぶどいも：徳島。

21）ポテト：北海道・大阪・和歌山。和歌山の場合はアメリカ移民の帰国者の家庭。

1-2 甘藷

1）甘いも：石川。

2）いも：　沖縄（八重山地方）。“いも”といえば、まずは甘藷だという地域は少なくないが、八重山では甘藷の名称としての「いも」である。

3）うむ、んむ：沖縄。八重山の「いも」に似る。

4）からいも：主に四国と九州地方。この名称は、ほとんどが甘藷用であるが、僅かながら馬鈴薯と菊芋にも使われている。（図、表参照）

5）甘藷、かんしょ：前者は主に引用文や紹介文書中に認められる。両者とも日常語としての使用は少ない。

6）きゅうしゅういも：三重（志摩）。

7）孝之芋:長崎（対馬）。

8）さつまいも、薩摩芋、薩摩いも、さつま、おさつ：ほぼ全国的に分布するが、やや西日本に偏在。「さつまいも」は甘藷を代表する名称。（表参照）

9）つるいも：高知。東京に馬鈴薯の「つるいも」がある。

10）とういも、といも、唐いも、唐芋：主に西日本。

11）はっちゃん：長崎。

12）ほいも：奈良。

13）ぼけいも：徳島。

14）りゅきいも、りゅうきゅういも、りゅうきゅう芋、琉球いも、琉球芋、りゅうきゅう、りきいも：西日本に分布。検出地点数は多くない。（表参照）

1-3 里芋類

1）赤いも：富山・山梨・愛知。葉茎の色に由来する。

2）あらいも：大阪。

3）いものこ、いもの子、芋の子、いもこ、いも子、いもんこ、いもん子、いもご、えものこ、えもの子：いもんこといもん子は九州に、その他は主に東北地方に分布し、全体としては東日本に多い。（表参照）

4）うむ:鹿児島（奄美地方）。沖縄に甘藷の「うむ」がある。

5）えのいも：広島・長崎。

6）からかさいも：石川。

7）からとりいも、からどりいも：宮城・熊本。

8）けいも、毛いも：群馬・静岡・宮崎。

9）こいも:近畿と中国地方を中心とした西日本に多い。“小さい芋”を意味するものはできるだけ除いてある。（表参照）

10）里芋：全国的であるがやや西日本に多い。仮名表記の“さといも”は検出されない。里芋類を代表する名称。（表参照）

11）しろいも、白いも：山梨、西日本に多い。葉茎の色に由来する。

12）ずいきいも、ずきいも：主に西日本。“ずいき”は葉茎であるが、葉茎専用種に限定されることなく、里芋全般の意味で使われているケースが少なくない。

13）ずぼぬき、ずぼいも：岩手。

14）田いも、田芋、たいも：主に西日本。

15）ただいも：岐阜・三重・奈良・愛媛・宮崎。

16）たついも：愛知。

17）地いも：愛知・徳島。

18）露いも：愛媛。

19）天竺いも：大分。

20）とういも、といも、唐いも、唐のいも：全国的に分布。検出地点数は少ない。

21）ねばいも：富山。

22）ねいも：佐賀。

23）はすいも：四国と九州地方に多い。（図、表参照）

24）はたいも、畑いも、畑芋、はだいも：宮城・福島・佐賀。

25）ほいも：奈良。

26）まいも：岐阜・徳島。

27）水いも：福岡・佐賀・沖縄。

28）やつがしら、八つ頭：日本の中央部に偏って分布。（図、表参照）

1-4 長芋類

1）一年いも：石川。

2）いちょういも：秋田・栃木・滋賀・鳥取。

3）おりいも：富山。

4）きりいも：静岡・京都・鳥取・広島。

5）こうしゃ：鹿児島（奄美地方）。

6）じねんじょ、自然薯：全国的に分布。（表参照）

7）つくいも：栃木。

8）つくねいも、つぐねいも：西日本に分布。（表参照）

9）手いも、てのひらいも、仏掌薯：東京・静岡。

10）とろろいも、とろいも：主に東日本。（図、表参照）

11）ながいも、長いも、長芋:主に東日本。長芋類でトップの名称。（表参照）

12）にぎりいも：秋田。
13）ばかいも：福島。
14）へらいも：秋田。
15）やまいも、山いも、やまのいも:主に西日本。「ながいも」に次ぐもの。（表参照）
16）やまといも：埼玉・東京。
17）らくだいも：宮城・栃木。

1-5 菊芋

1）がしいも：青森。
2）からいも：岩手・山形・新潟・岐阜。
3）きくいも：東日本に偏在。“菊芋”という漢字表記はない。（表参照）
4）はないも：徳島。

2．長芋の珠芽（むかご）の名称と検出地点

イモ類の名称とは別枠に珠芽の名称を以下に示した。

1）かご、くぁご、かんご：福岡・長崎・熊本。
2）きご：岐阜。
3）ごんご：福井。
4）ひめ：熊本。
5）むかご、しかご、にかご、ぬかご、みかご：主に西日本に分布。このグループが珠芽全体の3/4を占める。

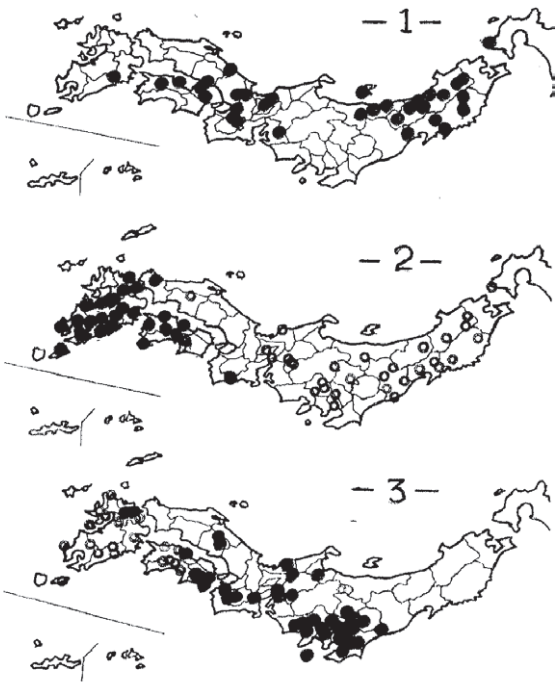

図1　名称の分布に特徴あるケース

－1－　●にどいも・二度いも
－2－　●からいも（甘藷）　○とろろいも・とろいも
－3－　●やつがしら・八つ頭　　○はすいも

3．主なイモの名称とその検出地点数と検出頻度

検出地点数に関連する値を表1の左欄に示した。

馬鈴薯と甘藷では、それぞれ「じゃがいも」と「さつまいも」という一つずつの名称にほぼ絞られていることが割合%欄から確認できる。その理由として、里芋や長芋に較べてかなり歴史が新しいことにより、変異を引き起こすに必要な時間が短く、伝来時の形態がそのまま或いはそれに近いかたちで維持されたためと考えられる。その結果、人々が抱くイメージが変わることなく名称も伝来時のまま残ることになった。

里芋類全体では名称数そのものが多いため、検出地点

表1　主な名称の検出とその東西地域性

	名称の検出地点数				東西地域性の比較		
	名　称	検出地点数	検出頻度	割合%	検出地点比平均値 東日本	比較	西日本
馬鈴薯	じゃがいも	264	.892	72.52	.973	≫	.822
	にどいも	35	.118	9.59	.140	＝	.099
	その他	65	.220	17.89			
	名称全体	364	1.230				
甘藷	さつまいも	260	.878	71.38	.781	≪	.976
	からいも	25	.084	6.83	.000	≪	.173
	りゅうきいも	13	.044	3.58	.006	＜	.078
	その他	66	.224	18.21			
	名称全体	364	1.230				
里芋	里芋	272	.919	54.96	.859	＝	.985
	やつがしら	44	.149	8.91	.200	＝	.102
	はすいも	22	.074	4.43	.015	＜	.138
	いものこ	22	.074	4.43	.110	＞	.034
	こいも	21	.071	4.25	.034	＜	.109
	その他	114	.385	23.03			
	名称全体	495	1.672				
長芋	ながいも	130	.439	37.05	.555	≫	.352
	やまいも	121	.409	34.51	.342	＜	.501
	とろろいも	29	.098	8.27	.166	≫	.014
	じねんじょ	27	.091	7.68	.107	＝	.082
	つくねいも	17	.057	4.81	.044	＝	.079
	その他	27	.091	7.68			
	名称全体	351	1.185				
菊芋	きくいも	13	.044	72.13	.077	＞	.012
	からいも	3	.010	16.39			
	その他	2	.007	11.48			
	名称全体	18	.061				

注1　「名称」の欄のイモ名は、各名称グループの代表者の名前である。
注2　名称全体の欄は、各イモ名称（その他を含む）ごとの検出地点数と検出頻度の合計値。
注3　東西地域性の比較は検出地点数の多いものに限った。
注4　≫,≪：1％水準で有意差あり
　　>,<：5％水準で有意差あり
　　＝：有意差なし

総数および検出頻度の値が他のイモ類の値よりもかなり高い。それは、芋と葉茎の両者を食用にするという用途の広さと伝来以来の長い歴史によるものと考えられる。

個々の名称としての「里芋」は里芋類を代表する名称となっており、“山の芋”に対する“里の芋”として、分かりやすく親しみやすかったものと推察される。しかし、割合％が「じゃがいも」や「さつまいも」に較べるとかなり低いのは、長い歴史を有する里芋類全体には、他に有力な名称が多数存在するためと考えられる。

「やつがしら」と「はすいも」については、里芋類全体を指すのか、葉柄を目的にするものか、という点についての記述に混乱や曖昧さがかなり認められたが、一応、里芋全体を現すものとした。

長芋には、馬鈴薯、甘藷、里芋にみられるような突出した名称が認められない。それは、長い歴史に加えて、かなり性質を異にする複数の系統や天然物と栽培物などをまとめたものであるため突出するものが出にくかったためと考えられる。「ながいも」と「やまいも」はやや高い数値でもって拮抗し、地域性は東西逆の関係にある。「とろろいも」の東西地域性の違いから、“とろろ”として食べる伝統が東日本に多いものと推定される。

菊芋は、短い歴史といち早く忘却されたことからか、数少ない名称に留まっている。

4．名称の東西地域性

名称の東西地域性の解析結果を表１の右欄に示した。

馬鈴薯については、全体として西低東高である。この傾向は、別途に報告するイモ類そのものの検出地点比および料理比についても同様の西低東高であること[(3)]が認められている。

甘藷については、明らかに西高東低である。検出地点比および料理比についても同じく西高東低である[(3)]ので、西高東低の傾向はすべて一致している。

里芋では、マイナーな名称については地域性が存在するものの、全体としては地域性が認められないものと判断される。検出地点比や料理比の場合も東西地域性が認められない[(3)]ことと一致している。長い歴史が均質化を促しているものと考えられる。

長芋の場合、不一致が存在するものの、全体として東西地域性はさほど高くないものと判断される。このことは検出地点比と料理比の傾向[(3)]とほぼ一致している。長芋類は、栽培が全国各地で行われていることと自然薯が全国的に自生していることにより、全体として地域性が低くなったものと考えられる。

菊芋の東西地域性は西低東高であり、検出地点比と料理比の傾向[(3)]と一致している。

ま と め

1）聞き書・日本の食生活全集の記述中のイモ類について、いわゆる戦前の時代に使われていた名称を検索した結果、標準和名を含めて馬鈴薯37、甘藷29、里芋50、長芋26、菊芋４、計146の名称の存在を認めた。

2）主な名称の検出地点総数、使用頻度とその割合を求めた。それぞれのイモの中での割合％を比較すると、馬鈴薯、甘藷、菊芋のそれぞれでトップの「じゃがいも」「さつまいも」「きくいも」のいずれも70％以上の高い値であるのに対して、里芋類トップの「里芋」が55％、長芋類トップの「ながいも」が37％の低い値であり、イモ類それぞれの持つイメージが、前３者ではほぼ単一であるのに対して、里芋類と長芋類では多様であることを示している。

3）検出地点比の値でもって名称の東西地域性を検討した結果、馬鈴薯と菊芋では西低東高、甘藷では西高東低の傾向が認められたが、里芋と長芋では確たる傾向は認められなかった。

文　献

（１）農文協編集委員会：聞き書・日本の食生活全集（アイヌ版を除く都道府県版47巻，索引２巻）およびそのCD版，農山漁村文化協会（農文協）（1982～1993）

（２）本間伸夫・立山千草：「戦前における日本人の食肉嗜好を鶏肉が支えていた−聞き書・日本の食生活全集の記述データの数量化による解析−」，新潟の生活文化, No.27, p.１, 新潟県生活文化研究会（2021）

（３）本間伸夫・立山千草：「戦前の食生活においてイモ類の主役は里芋であった−聞き書・日本の食生活全集の記述データの数量化による解析−」No.28, p.５～７，新潟県生活文化研究会（2022）